インクルーシブ教育推進のための交流及び共同学習（Ⅰ）

企画者　浅間耕一（大阪教育大学附属特別支援学校）
山本利和（大阪教育大学）
司会者　山本利和（大阪教育大学）
話題提供者　浅間耕一（大阪教育大学附属特別支援学校）
高岸康文（大阪教育大学附属平野中学校）
土居由雅（八尾市立志紀小学校）
山口龍太・秋山由佳（大阪教育大学大学院教育学研究科）
指定討論者　冨永光昭（大阪教育大学）
大崎博史（国立特別支援教育総合研究所）

交流及び共同学習　インクルーシブ教育　教育効果

【企画趣旨】

誰もが相互に人格と個性を尊重し支え合い、人々の多様な在り方を相互に認め合える全員参加型の社会「共生社会」の実現をめざし、障害のある子どもとない子どもが、可能な限り同じ場で学ぶことを追求するとともに、教育的ニーズに最も的確に応える指導を提供できる多様で柔軟な仕組みを整備する「インクルーシブ教育システム」の構築が求められている。この目的の達成をめざして、多くの学校の幼児・児童・生徒が交流し、共に学び合う授業に取組んでいる。ただ、交流及び共同学習の授業の回数が少なかったり、行事の延長として行われていたりすることも多い。交流及び共同学習の教育効果をより上げるためには、継続した取組みが必要だろう。

本シンポジウムでは、事例として大阪教育大学附属特別支援学校と大阪教育大学附属平野中学校の交流及び共同学習の授業の工夫、及びその効果を測る尺度、事前指導などを取り上げ、インクルーシブ教育推進のための交流及び共同学習には、何が必要なのかを検討する。

【話題提供者の趣旨】

ⅰ．特別支援学校から見た交流及び共同学習（浅間耕一）

附属特別支援学校と附属平野中学校の交流及び共同学習は、今年度で６年目を迎えた。昨年度は授業の回数を年間10回に増やし、①フライングディスク、②ダンスや地図作り、創作遊び作り、③近隣の小学校に自分たちが学んできたことを発表することを題材とした。授業の工夫として、事前に自己紹介シートの交換を行い、初回の授業はＩＣＴを使い遠隔交流を行ったり、グループ・ペアを作ったりして安心できる雰囲気作りを行った。また、共通の目標に取組み、一緒に感情が高まるような機会を設けた。これらの授業の内容と特別支援学校の生徒の変化を報告する。

ⅱ．通常の学校から見た交流及び共同学習（高岸康文）

附属平野中学校は附属特別支援学校から徒歩 20 分くらいの距離にある。ＰＤＣＡサイクルを重視し、交流及び共同学習が始まる前には、特別支援学校の教員と協働して授業準備を行い、授業後にはふりかえりを行った。

中学校の生徒たちの中には、交流開始前に「自分たちが特別支援学校の生徒を手助けする。」という発想をもっている生徒がいたが、取組みを重ねるにつれて、自分と同様に特別支援学校の生徒も中学校の生徒のことを考えて取組んでいることに気がつき始めた。これは生徒間にインクルーシブ的な意識が芽生え始めたといえる。

ⅲ．交流及び共同学習の教育効果を測る（土居由雅）

授業を行うだけでなく交流及び共同学習を通じて生徒の意識が深まったかどうかを調べることが重要である。そのための授業の観点別ルーブリック評価、印象評価、エピソード評価がおこなわれた。また一緒に活動することに効果があるという結論だけでは、授業の向上につながりにくいので、授業の効果が生み出されたメカニズムについての考察が重要になる。そこで、授業の効果が交流相手への対人魅力が増すためにもたらされるという仮説を提案し、その検証を行なったので報告する。

ⅳ．事前指導について（山口龍太・秋山由佳）

附属平野中学校の生徒に対し、新しい原則に基づく障がい理解の事前指導を行った。第１回は、２時間の授業で、「ピーター君とクラスメイト」の映像を生徒に視聴させ、ピーター君とクラスメイトの関わりについて考えさせた。第２回は、生徒に交流及び共同学習の疑問点・知りたいことを書かせ、その結果をふまえ授業を行った。①学び合いの大切さ、②相手を知るとは、③もっと知りたい、④英国自閉症協会：ＳＰＥＬＬとは,について、発問をしながら授業を行った。この授業による生徒の意識の変容を探るため、事前指導の前後に意識調査を実施したが、この取り組みと検証結果について報告する。

【指定討論者の趣旨】

ⅰ．（冨永光昭）

本報告における交流及び共同学習の特色は、①障がいを肯定的側面からも捉える、②障がいを自分たちの問題として捉える、③障がいを社会的障がいとして捉える、④障がい生徒の本人理解をすすめる、⑤活動と認識を統一するという５原則を基に実践が展開されている点にある。このような新しい原則に基づく障がい理解教育のあり方、中学校段階での障がい理解教育の意義、自己・他者理解の位置づけ、障がい生徒の意識の変容の分析の意義、M-GTA による中学校生徒の感想文分析・意識調査による生徒の意識変容分析の意義、事前指導・交流及び共同学習の授業分析の必要性等について提案したい。

ⅱ．（大崎博史）

話題提供を受け、インクルーシブ教育を推進するための交流及び共同学習の在り方について、主に学校間で協働して進める授業づくりとその評価、計画的・継続的に行うための工夫等について述べる。また、新学習指導要領にもある、「（障がいのある子もない子も）共に尊重し合いながら協働して生活していく態度を育む」ための方策についても地域の中で共に学び、共に暮らすという視点からダイナミックに考えていきたい。

(ASAMA Koichi, YAMAMOTO Tosikazu, TAKAGISHI Yasufumi, DOI yuka, YAMAGUCHI ryuta, AKIYAMA yuka, TOMINAGA Mituaki, OSAKI Hirofumi)